

苗場山麓地域 現地審査報告書

【日程】 2014（平成 26 年）8 月 4 日～5 日

【審査員】

佃 榮吉（日本ジオパーク委員会）
小野 昭（日本ジオパーク委員会）
日比野 剛（白山手取川ジオパーク推進協議会）

【現地視察の主な参加者】（職名）

上村憲司（めざせ！苗場山麓ジオパーク振興協議会長・津南町長）
島田茂樹（めざせ！苗場山麓ジオパーク振興協議会副会長・栄村長）
村山昇（津南町副町長）
齋藤家富（栄村副村長）
桑原正（津南町教育長）
宮川幹雄（栄村教育長）
小野塚均（津南町総務課長）
齋藤文成（栄村商工観光課長）
佐藤雅一（津南町教育委員会ジオパーク推進室長・学芸員）
佐藤信之（津南町教育委員会ジオパーク推進室・文化財専門員）
中沢英正・滝沢美樹（津南町教育委員会ジオパーク推進室）
福原一男（栄村振興公社総務係長）
本山佐利（津南町観光協会・ジオパークガイド）
小島隆夫・風巻トシ・大塚与四次・福原洋一・福原とも子・高橋廣幸・高橋一彦（ジオパークガイド）、
他に振興協議会商品開発部会のメンバーなど

【見学地点・行程】

- 1 日目：農と縄文の体験実習館なじよもん、ごつつお市、会長等聞き取り（津南町役場）、部会活動見学、マウンテンパーク、山伏山、龍ヶ窪、穴藤のムカシマンモス産出地
- 2 日目：逆巻の川原、見倉集落と風穴、秋山郷総合センターとねんぼ、布岩、切明・河原の温泉、上野原・鳥甲山、のよさの里、大瀬の滝、結東・石垣田、見玉集落・不動尊・石落とし、質疑応答・講評（津南町役場）

【現地審査のまとめ】

1) 苗場山麓ジオパークの概要

苗場山麓地域は、長野、新潟県境に位置し、栄村と津南町全体をジオパークのエリアとしている。県境はかつての信州、越後の国境でもあるが、地理的な影響を受け境をまたいで交流も昔から多い。

このジオパークの特徴は第四紀にある。鳥甲山や苗場山などの火山活動にともなう溶岩など

の火山噴出物の堆積と、現在の地形に至るまでの浸食作用がこの地域で今見られる景観を形作っている。鳥甲山と苗場山の溶岩が時期を隔てて堆積し、二段にわたる厚い溶岩層を形成後、中津川の浸食作用などにより谷深く続く絶壁の大露頭と地すべりなどの崩壊地形が作り出され、秋山郷に特徴的な景観を作り出している。また、砂礫の供給源の豊富さと豊かな水による浸食・運搬・堆積の作用が、信濃川との合流部付近に規模の大きな河岸段丘を作り出している。さらに、この地域の大きな特徴は、これらの地質・地形的要素の上に形成されてきた人々の歴史と暮らしにある。国指定史跡の沖ノ原遺跡など、大規模な河岸段丘面を利用して集落が作られた縄文時代から始まり、中津川沿いの秋山郷は、地滑り地の上に作られた集落形態と暮らしが、江戸時代にすでに秘境として紹介されるなど、独特の景観と文化を残してきている。地質・地形・生態系・文化などの多彩なジオサイトが存在し、各地域でのジオパークとしての取り組みが活発に行われつつある。

2) ジオサイトと保全

かねてより、苗場山麓地域の地質と気象的要因によって中津川が作り出した秋山郷の絶景と津南町のダイナミックな河岸段丘を観光の対象として売り出していた地域である。河岸段丘、溶岩と浸食と地すべりによる秋山郷の景観、湧水や風穴、豪雪など、地質・地形や自然と縄文時代から続く人々との関わりを示す遺跡や文化などが豊富に存在し、魅力あふれる多彩なジオサイトがある。しかし、テーマやストーリーのまとまりとしては、もう一步整理を進める必要がある。特に、縄文遺跡や秋山郷の文化などは、他の地域にはないこの地域のジオパークとしての特徴でもあるので、ジオ的な資源との関わりをしっかりと含めて、一般的にもわかりやすいストーリーの展開を期待したい。また、豪雪と関わりの深い風穴や湧水についても更に科学的研究を支援し、資源的価値の向上と興味深いストーリー構築を期待したい。

また、ジオパークを応援・サポートするために発足した“ジオ”の名前を冠する住民団体や、地区の有志などにより、住民レベルでのジオサイトの保全活動が行われている。地区として共有地のジオサイトへの活用に協力するところもあり、地域内でのジオパークに関する意識の高まりも感じられる。

山伏山の風穴や、結東の石垣田など、いくつかのジオサイトでは、今後人が多く訪れることによって、石垣の崩れなど資源が荒れることが考えられる。こういったサイトの保全方法を検討する必要がある。

3) 教育・研究活動

めざせ！苗場山麓ジオパーク振興協議会の事務局は、津南町教育委員会内に置かれており、授業や野外体験活動、教員研修など、学校教育での取り組みが着実に進められている。教育委員会所管の農と縄文の体験実習館「なじょもん」の利用は10年の活動実績のもとで積極的に行われ、ジオパークに関する常設展示コーナーも設けられている。

振興協議会には学術検討委員会が設置され、新潟大学を中心として専門的事項に関するバックアップ体制が整っている。特に、新潟大学災害・復興科学研究所との協力のもと、防災教育について意欲的に進められつつある。

また、振興協議会予算として調査研究費を計上するなど、ジオパークの基盤となる学術研究を推進している。

4) 管理組織・運営体制

津南町と栄村という新潟県と長野県の県境をまたいだエリアであるが、昔から交流の深い地域であり、連携はスムーズにとられている。奥信越地域振興事業を通して長野県・新潟県両県

は資金的支援を行っている。長野県北部地震の影響もあり、栄村が復旧に力をそそぐ分も津南町側で人員を割いて推進体制を整えており、両自治体の協力体制が具体的にみられる。2013年暮れに設立された振興協議会は、部会活動が頻繁に行われ、活発な意見交換もされている。事務局体制も、精力的に活動を進めるスタッフが存在し、ジオパーク全体の方向性のコントロールもうまく機能している。ただし、現状の事務局体制は、教育委員会に偏っている部分もあり、観光面や防災面などジオパークに関連する別部門とスムーズに連携して事業がすすめられるような体制の整備が必要になる。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

ジオツアーに関しては、実施されてはいるが、一般向けにはまだそれほど開かれていない。ジオパークガイドの養成講座が実施されており、すでに活動中の観光ガイドだけでなく、地域住民も参加している。ガイド養成講座もまだ途中ではあるが、ガイド方法を工夫したり、地元の面白い内容を盛り込んだりしながらのガイドは興味を引く。また、学習意欲も高く、ジオサイトに関する内容を率先して吸収しようとする人たちが多く。しかし、ジオパークのガイドとしては、ジオサイトごとの説明のみに陥ってしまうことが多々あり、ジオパーク全体のことを意識しながら解説できるように、より経験を積む必要を感じる。また、エリア内だけでなく、エリア外の一般訪問者向けへの発信を本格的に行い、一般ツアーが開催できるように検討を重ねる必要がある。

ジオツーリズムと関連して、重要なジオサイトにおける解説看板などの整備を進めることも重要である。その際にはできるだけ統一されたデザインで、ジオパーク内にいることの演出を図るとよい。ジオパーク関連商品の開発は、部会活動を通じて活発に行われているので、継続した活動となることが期待される。なお、再生可能な資源である湧水が「津南の天然水」として民間から製造販売が始まっている。ジオパークとの連携を考慮する価値がある。

また地域の持続可能な発展のためには、地域住民全体としての理解が欠かせない。より多くの人たちがジオパーク活動に参加したくなるように、教育活動とあわせ継続して普及・啓発活動を行うことが求められる。

6) 国際対応

案内看板ではタイトルに日本語に加えて英語表記がされる予定である。現状では外国語対応が成されている場所はあまりなかった。著名な観光地ではなく外国人客は多くはないが、外国人客のニーズ多様化に対応するため、今後、外国語に対応できる拠点施設、ジオガイド、パンフレット、ホームページ等の整備を進めていく必要がある。

7) 防災・安全

地すべり地や、急崖の近くなど、この地域ならではの見どころがジオサイトとなっているが、その場所での危険性や、急な災害などに関する注意事項をなんらかの形で訪問者に伝える手段を講じる必要がある。ツアー客にはガイドから注意を促すことはできるが、個別の訪問者があっても考慮した対応も必要である。

8) 結論

縄文遺跡や秋山郷を中心とした取り組みが、長い間地道に行われてきた地域であり、文化とともに同様に発信してきた中津川沿いの大絶壁（大露頭）や、大規模な河岸段丘と絡め多彩なジオサイトを発信しようとする、地域の意気込みが感じられ、他にない特徴的なジオパークとして発展する可能性を持っている。長野県北部地震からの復興や防災への意識付けとしてのジオパークという目的も、事務局だけでなく地域で活動する人たちにとっても同様の意識を共通

して持てるようになっていと感じる。振興協議会の活発な部会活動や、地域住民による自主的活動などは、日本ジオパークネットワークに対しても十分に発信できる。以上から、苗場山麓地域は、日本ジオパークに加盟する一定の水準に達していると判断し認定するものとする。